

## 筍

下平 眞理

冬の間は黄ばんだベージュ色の芝庭に点々と雑草がのぞき始めると、昨年末に植木屋さんが綺麗に仕上げた庭に次々と花が咲き始める。こぶし、れんぎょう、ぼけ、雪柳、椿。目にまぶしい新緑の季節に移るころ筍が出始める。隣地とは境界杭はあるものの柵はなく、丘陵地なので我が家の庭とは三メートル程の高低差があり、その斜面が竹林になっている。地下茎は何処までも伸びていて、庭のあちこちで、筍の穂先が出て来る。

手をかけないのは野生と呼ぶのか、自生と呼ぶのか。出始めると何処か心待ちにし毎朝どの程度の大きさになったのか確認作業が欠かせない。

筍の周りにスコップを入れ、掘りにかかる。庭全体に庭木や竹の根が入り組んで蔓延っているので底まで掘るのは難しい。ある程度周りからせめて全体重をスコップにかけ、手応えがあつたら持ち手の方に体重を移し梃子の原理で掘り起こす。樹液がじわっと染み出てくる。すかさず八工が寄ってくる。野生の筍は店頭に並んでいるような円錐形ではなく、先細りの円柱状が多い。ごわごわとしたこげ茶色の表皮の産毛はとげとげしく野趣に富む。

食用には根元が直径十センチくらいはあつたほうがよく、高さは五十センチになつても本体部分は柔らかく問題は無い。むつくりとした穂先が好ましい。外皮を数枚剥くと、紗のかかったような薄紫色の穂先と白っぽい黄土色の根元。出始めの筍は勢いがあり、根元付近も太く大きくなるが二週目に入るととたんに細くなる、栄養が尽きてきたということか。そのままにしておくとおつという間に竹になり庭の方にしなだれかかる。そうなるとゴミに出すのも一苦労ではなく、大仕事。とりあえずは掘るか刈るか切るか処理が必要となる。

見上げると青々としていた葉は金茶色になりはらはらと舞い落ちる。太陽光線を浴びると金色にも見える。筍を育てるのに養分を取られるためらしい。庭が白い竹の葉で覆われるようになると筍の季節が終わる。竹秋、季語にもなっている。